

.....

討論：

B. ラッセルをめぐる諸疑問、とくに様相の形而上学について

三浦俊彦

自然科学の世界では、概してテキストに対する敬意が薄く、原論文を流し読みして概略を掴んで事足りるとすることが稀ではない。人文系の基準からすると、自然科学者のテキスト読解の杜撰さはときに目にあまるものがある。啓蒙書に限らず専門科学論文にも通底するテキスト軽視傾向、とりわけ用語の誤解については、私も幾度か苦情を書いたことがある(三浦, 2000, pp.234-5, 2006, p.104 等)。

人文科学の中でも、論理分析系の哲学は気質的に自然科学に近いこともあってか、オリジナルな議論が為されてさえいれば、そのたたき台となるテキストの読解は不正確でも許されるくらいがなくもない。一つだけひどい例を挙げると、ソール・クリプキによるラッセル論が典型だろう。『名指しと必然性』でクリプキは、ラッセル哲学には固定指示や指示の因果説の発想がなく、様相への考慮が欠けていると述べ(Kripke, 1972, 1980 の特に「まえがき」)、ラッセルを批判することで自説の獨創性を発揚する手法をとっている。しかし実際のところ、ラッセル哲学に固定指示や様相論理が無いなどというのはとんでもない見当違いだ。論理的固有名に結晶するラッセルの言語論やセンスデータ論こそは固定指示説の模範と言うべきである。クリプキは同時期にラッセル記述理論を論敵に対して擁護する陣頭にも立った親ラッセル派だが(Kripke, 1977)、そのクリプキにしてこのありさまなので、分析哲学におけるテキスト尊重の意識は、歴史研究の隆盛を見つつある最近は多少改善されたとはいえ、人文系他分野に比べかなり低いと言っていいだろう。

そういった現状で、テキスト重視を説く態度は基本的に望ましいものである。『科学基礎論研究』第106号に掲載された拙著『ラッセルのパラドクス』(岩波新書、2005年。以下「本書」と記す)への書評は、私がラッセルのテキストを軽んじている気配に対する批判を主としている。評者の高村夏輝氏は、本書の出版意義を認めながらも「三浦氏は非常に多くの間違った理解を示している」とし、その間違いを具体的に列挙して疑問を投じる形で書評を進めた。

本書を「テキスト」と呼んで、目の書評対象そのものが第一の「テキスト」であることを重々承知しているはずの高村氏だが、しかしその高村氏自身に読解の甘さが見られるのはまことに残念なことであった。率直に言うと、高村氏の列記した批判点のすべてが、誤読か曲解の産物のように私には思われるのである。

高村氏の抱く最大の疑問は、本書 p.200 以降の「多重世界論」に対してなので、そこを重点的に回答対象とするが、その前に、明らかに誤解である箇所、あるいは些細と思われる批判にすべて答えておきたい。(以下、〈p.〜〉表示はすべて本書の頁。書評の引用は〈〜頁右、左〉という表記で行なう)。

* 1

まず、本書 pp.25-6 について。「ムーアとラッセルの实在論への転換をイギリス経験論の復活としているが、当時のラッセルのどこが経験論的なのだろう。あるいは、ヒュームやミルからどんな肯定的な影響を受けているのだろう」(41 頁右)。ここは単純な誤読である。本書 pp.25-6 は、「イギリス経験論哲学の伝統が一時的に途絶え」ヘーゲル思想が流行ったとし、ムーアとラッセルによって「ロックやヒュームの分析的スタイルが蘇った」と述べているだけだ。スタイルという語は、内容ではなく文体や論証姿勢を指す。「分析的スタイル」が復活したという時流に関する記述は、個人の影響関係に関する記述ではない。「ラッセルがイギリス経験論を復活させた」と書いてあるかのような批判は的外れだろう。かりに pp.25-6 が誤解を招く表現だったとしても、第 9 章冒頭で改めて、初期ラッセル哲学は大陸合理論にむしろ近いと念を押してある。ただしラッセルの自己認識は「経験論哲学者」であり、それは、彼の後期の哲学も含めれば正しい、と私は書いたのだった。

p.161 の「構成主義へ戻る」「復帰する」という表現について(40 頁注 7)。ラッセルの認識論が「そうあるべきだった方向」つまり『プリンキピア』の構成主義的手法を認識論に応用する方向へ行かずに、なぜか懐疑的实在論という方向へ行きかけたのを、ホワイトヘッドによって引き戻された、という流れなので、「戻る」が奇異な表現だとは思えない。認識論と数学とは違う、という批判のようだが、両者を構成主義的な同じ枠組で捉えるのが本書の目的だったことは、高村氏も書評冒頭で意義を認めているので、なぜことさらに問題視するのが不明である。

第 7 章の私的言語批判への批判について。高村氏は「言語には規範性が必要なのに、私的言語という想定ではそれが満たされない」という私的言語批判の本質的論点に何も触れていないため、応答になっていない」と言う(41 頁左)。「規範性を社会性以外で説明することで、私的言語にも規範性を認めることができる」等の論点を出してほしかったとの要望だ。しかし、まさにそのことを本書は述べているのである。「かりに社会性を至上命令とする姿勢が正しいとしても、社会性がテーマとして表面化していなければ社会性の正しい考察ができないということは出てこない」(p.149)「さまざまな社会現象を構成する主成分が言語であるからといって、言語もまた社会的だと考えるのは、まさに分割の誤謬である。また、かりに言語の運用が社会的だとしても、その社会性を解明すべき理論が、社会なるものを始めから前提した道具立てを持つべきだとはかぎらない」(p.150)というあたりの論述で、高村氏の要望はすでにカバーできていると思われる。「規範性」が「社会性」であろうがなかろうが、「社会性」そのものが「社会性」のレベルで説明されねばならないという思い込みこそラッセル的還元主義(ひいては科学的世界観)に反している、と私は指摘したのである。

また、「p.100 では『数学の諸原理』がマイノング的存在論を持っていたが、記述理論

によってそこから脱却したとしている」のはおかしいと言う*1。高村氏のこの指摘（41 頁右）は意味不明と言わざるをえない。『数学の諸原理』の表示概念の学説はマイノング的存在論ではない、という意味だろうか。「マイノング的」という言葉は多義的であり*2、ラッセル自身が『数学の諸原理』をマイノング的と評しているので、「『数学の諸原理』がマイノング的存在論を持っていた」と認めることに何ら落ち度はないはずである。

あるいは、表示概念を論じずにすませたのが問題視されているのか。たしかに、「denote を「指示する」と訳すのはまずい」（飯田, 1987 の末尾）と念押しがされて以来、日本でも表示概念について慎重な考慮が払われるようになってきているのはよい風潮なのだろう。しかし、ラッセル論の切り口によっては、言語と所期の指示対象とを媒介する項を迂回して論ずることはなんら咎められるべきことではない（言葉による指示か概念による表示かという区別はラッセルにとって一時しのぎ的な手当てにすぎなかったことを別にしても）。そもそも本書の構成からして、『数学の諸原理』に触れた第 2 章と記述理論を論じた第 6 章まではだいぶ距離がある。第 3 章～第 5 章のタイプ理論との直接の関連で記述理論を私は論じたかったのであり*3、『数学の諸原理』から記述理論へダイレクトに（戸田山, 2007 のように）繋げた場合なら論じる意味があったであろう表示概念にあてるスペースを、むしろ還元公理等、タイプ理論の詳述に使うのが本書の視角に合致していたのである。それがまずいというならば、表示概念の説明を略したことによって特に本書の構成のどこにひずみが生じたのか、明らかにしてもらわねばならない。言及せずに済まざるをえなかったラッセルのアイディアは、表示概念の他にもたくさんあるのだから*4。

*1 p.100 は高村氏の誤記で、正しくは p.110 である。

*2 「マイノング的」存在論のさまざまなタイプについては、三浦, 1995, 第 4 章の第 4、5、6 節を、ラッセル記述理論を論じた第 1 節と比較していただきたい。『数学の諸原理』の表示概念は、第 6 節で「種類説」と名づけた存在論に近いと解釈できよう。なお、可能世界論をおしなべて「マイノング的」と呼ぶ文脈すらあることを付言しておく（三浦, 1995 ではそれぞれ厳密に区別したが）。

*3 タイプ理論と記述理論を全く別個に論ずるラッセル論が多いため、私は二つの理論の関連性をあえて強調したのだった。ラッセル自身の哲学的自伝（Russell, 1959）そのものが、タイプ理論と記述理論を全く別々に論じており、関連性を一切仄めかしていない。

*4 たとえば、本書では「命題関数」という言葉を使わず「属性」「関係」という語で通した。そのため、「命題と命題関数のどちらがラッセルにとって基本的か」といった重要問題にも触れなかった。ただ、「命題関数」について p.66 で注記したように、「指示と表示」についても注の一つくらい付けておく手はあったかもしれない。いずれにせよ、奇異な話題ひしめくラッセル哲学の中では「表示概念」はかなり地味であるし、限られたスペースで最大限煽りたい本書の目的からして、アドホックな迂路を律儀に辿るような論述は構成上マイナスに働いただろう。

さて、「論理的実在と物・心とは、タイプ理論的に異なるタイプに属し」（p.200）に對して、論理的実在は特定タイプに限定されないのだからおかしい（41 頁注 7）というのは、その字句だけとればその通りである。しかし本書の直前の記述はこうなっている。「物も心も、論理法則によって束ねられる論理的実在（論理形式、集合、数など）からの構成物ということになる」。高村氏の引用した部分の「論理的実在」は、「物や心の構成要素となる論理的実在」あるいは「物や心の構成に用いられる論理的実在」ととるべきなので、「異なるタイプに属し」と言えるはずだ。このような、自然に読解できる文をあえて文脈から切り離して疑問視するのは、生産的とは言えまい。

「……第 2 オーダーの非述語的屬性だが、この属性 F は、何らかの第 1 オーダーの、つまり述語的な属性と実は同じものだというのだ」（p.81）への批判（41 頁左）も、瑣末に過ぎるように感じられた。オーダーの区別のことはすでに述べつつあるのだから、「同じ」と言っても全く同じと誤解される怖れはない。しかもここは、p.84 で「内包的」「外延的」という区別を語る以前の部分であり、p.83 で「どうせ同じ性質というのであればオーダーの区別など不要だろうに」といったクワインの苦情を紹介する直前の部分である。そうしたアンチ内包派の言い分の可能性を予期した「……実は同じものだというのだ」という問題提起法は、通常のレトリックの範囲内で許される、むしろ奨められる表現である。それとも、いちいち「実は同じものだというのだ（オーダーの区別はあるが）」「実は同じものだというのだ（すぐあとに述べるように内包的には違うが）」などと冗長な但し書きを付けるとでも言うのだろうか。

p.85 の、「事実の「語りかた」を重視するラッセルの内包的哲学は、属性や命題の本性を人間の心（語りかた）との関係で捉える姿勢に直結し……」への批判（41 頁左）も不可解だ。その事実が「謎」であることは、高村氏以前に本書そのものの問題提起なのだ。すぐあとに「……人間の語りかたとは独立した論理構造を信じる実在論者ラッセル本来の世界観と折り合いが悪そうなのは確かだ（この謎については、第 7 章で結論を出そう）」と述べてある。内包的世界記述と私的言語とを結びつけた「結論（答え）」が第 7 章 p.146 ～に書いてあるのは、高村氏自身が書評冒頭近くで暗示的に言及したとおり。そこを具体的論評へと広げないまま、あれこれ自前の解釈のみ示して「どうにもよく分からない」（41 頁注 8）と呟くだけでは、書評にはならないだろう。

以上で、高村氏の副次的な批判点についてはすべて答えつつもりである。「規定の枚数」「紙幅の関係」をさかんに心配しながら、以上の（瑣末な）諸論点に貴重な字数を費されたところを見ると、高村氏にとってそれら以上に重視すべきディテールは残っていないと見てよいだろう。文面とは裏腹に、私と高村氏の間にも実質的な意見の食い違いはないことが証明されているとも言えよう。

ただし、例外が一つあった。本稿はじめに述べたように、私たちの間には一つだけ、重大な認識の違いがあるようなのだ。ここでいよいよ、「もっとも深刻なもの」（39 頁右）と言われた主要論点、pp.200-201 の「多重世界論」の弁明に移りたい。

* 2

p.198 以降の 6 頁分は、「前途展望」と小見出しを付けたエピローグ的部分で、ラッセル哲学の解説を踏み越えて、外挿的な解釈を試みた部分である。本書の構成は、〈タイプ

理論の「存在」概念の「体系的曖昧さ」による垂直的多重世界を前半で紹介しつつ、終盤で（センシビリアからの外界構成の並行的多重世界）を描く、という美的な対応を目論んでいた。ストーリー上のそんなモチーフは持たず解説書を期待して本書に接した読者には、たしかに唐突な印象を与えたのかもしれない。

いちおう私は、「ラッセルのテキストに、「意識の必然的存在」を明言した箇所を見つけ出せるかどうか、私は調査していない」（p.202）とわざわざ但し書きをしておいた*5。

もちろんだからといって、テキスト軽視という高村氏の批判を免れることにはならない。高村氏は「テキストに書いてないじゃないか」と批判しているのではなく、「そんな主張を可能にする見解を述べているところが、ラッセルの著作の中にあっただろうか」（40頁右）と訝しんでいるのだから。高村氏の懸念は、「ラッセルのテキストから本当にそんな主張が導き出せるのか」ということだろう。

そこを確認した上で、高村氏の疑問に答えることにしよう。ラッセル哲学から「意識の必然的存在」や「多重世界」を導き出せるのかどうか。私はできると考える。また、ラッセルに様相の哲学はあったかどうか。本稿冒頭でクリプキの曲解にちなんで述べたが、ラッセルが豊かな様相の哲学を持っていたことに一抹の疑いもない。この2点を順に述べよう。

ラッセルのセンシビリアとは、「可能的なセンスデータ」のことである。実際に直知されていなくても、そこに意識主体と感覚器官があれば直知されただろう単位的クオリアがセンシビリアだ*6。意識主体、感覚器官の種類に制限はない。このようなセンシビリアという「可能的対象」を論理的原子と認めた時点で、ラッセルの哲学は、可能世界論のうち「組み合わせ主義」と呼ばれるバージョンへと一步を踏み出しているのである*7。

心理法則、物理法則は単純ではなく、論理的原子ではないので、センシビリアと単純普遍概念で構成するしかない。p.188 で述べたように、時間や空間さえ、センシビリアの配列によって構成されねばならない。心理法則、物理法則や、特定の時空的配置を前提してそれに合うセンシビリア群だけを「実在する物、心」と認定することはできないのである。

1. 論理的原子は、センシビリアおよび関係のような抽象的对象だけである。
2. 配列法としては、論理的配置（集合論的構成）という以外に特定の配置を優遇す

*5 このような但し書きをここだけに付けたということは、もちろん、本書の他の箇所の記述についてはすべて、ラッセルのテキストの裏付けがあるという意味である。

*6 直知 *acquaintance* の訳語として、高村氏の採用した「面識」はまずい。他の多くの人が用いる「見知り」も同様にまずい。『哲学入門』で高村氏も訳注を付けねばならなかったように *acquaintance* の媒体は視覚だけでなく、聴覚、触覚、感情、観念、さらには人間には不可能な感覚も含むからである。*ostensive definition* に「直示定義」という定訳があるが、直示による認知として「直知」が適当だろう。

*7 三浦, 1997, 第 15 節。ただしラッセルは、センシビリアという可能的対象を認めたことにより、いわゆる「現実主義的組み合わせ主義」を始めから超えていた。

る根拠はない。

3. 現実の集合と単に可能なだけの集合とを分かつ存在論的区別はない。

ラッセルの体系に通底するこの三つ*8をそのまま認めれば、あらゆるセンシビリアの可能的配置が同等の存在論的身分を主張できることは自明だろう。

このことは、別段驚くべきほどのものではない。なぜなら、ラッセルにとってはすでに、私たちが日常とりたてて「実在」として優遇しているあなたや私の心や体、富士山、太陽系のような実体すべてがしょせんは「論理的虚構」とされていたからである。他の論理的虚構もすべて、それなりに同等に（虚構的に）実在するくらいは許されて当然だろう。

もちろんラッセルは、馬は存在するがユニコーンは存在しない、といった区別を事あるごとに強調している。馬の個々の実例とユニコーンの個々の実例は、存在論的に区別されるべきだと言っているかのようである。しかしそうではない。すでにある特定の配置のもとで構成された「私たちの世界」から見れば、ユニコーンがいると整合的に主張はできないと言っているにすぎない。論理的虚構の一つである「私たちの視点」からすれば、ユニコーンも、ユニコーンの住む世界も、実在とは認められまい。『数理哲学序説』第16章で

ラッセルは、虚構世界のアイディアを「憐れむべき遁辞」と退けている*9。しかし本書は

「前途展望」として、もっと広いフレーミングでのラッセル的存在観を探った。私たちという特定の論理的虚構の観点からはユニコーンは端的な無であっても、私たちと同列の別の論理的虚構の観点からすれば、ユニコーンも、ユニコーンの住む世界も、実在せねばならないのである。私たち自身が実は「虚構」であるにもかかわらず実在と認められるような甘い基準（日常的基準）においては、ユニコーンも実在すると認めることは全然驚くべきことではない。ともに虚構としては「必然的」に存在していると認めてかまわないのだ（「虚構的に有る事柄は必然的に虚構的に有る」というS5の意味において）。

ちなみに、無限公理を考え直したことからわかるように、ラッセルにとって個体（センシビリア）は偶然的存在である*10。したがって正確に言うならば、私が論じたあらゆる心

*8この三つは、ラッセルのテキストの特定部分を取りたてて参照指示する必要もないほど、全体に行き渡った前提である（少なくとも中性一元論の時期においては）。三つのうちいずれかを否定する論者のほうが、立証責任を負うはずである。

*9 三浦, 1995, 第4章で私は、さまざまな虚構対象論を、非実在論・還元主義・唯名論的→非還元主義・実在論的のスペクトルにおおかた沿って並べたとき、ラッセルの記述理論を最も非実在論的な極に置いた。しかしそれは、あくまでフィクションという制度的対象をどうモデル化するかという問題に関してであり、一般の形而上学には直結しない。現にラッセルも含め、還元主義と実在論は決して矛盾しない。

*10 センシビリアの「存在」を語るこの用法は、ラッセルの「命題関数の性質としての存在」という厳密な用法とは異なる。個体について「存在する」と言える日常語法と、そう言うてはならないラッセル語法とを同じ語で表現せねばならなかったところに、ラッセル論の難しさがあると本書執筆中に痛感した次第だ。専門語法と日常語法の同音異義的併

の「必然的存在」とは、論理的構成の素材たるセンスデータがいくつか具現しているという条件のもとでは、外挿的なセンシビリアおよびそれらからの構成物の存在が必然的になるという、条件付き様相として理解すべきものであった。^{*11}

さてしかし、高村氏の疑問はもっと一般的なレベルに根ざしている。「三浦氏は「必然性」という様相概念を自由に用いて議論し、ラッセルが必然的な存在を認めていたと結論している。しかしラッセル自身は必然性や可能性といった様相の形而上学に対して非常に冷淡である」（40頁左）。

この高村氏の言には三つの問題点がある。第一には、かりにラッセルの文面が様相の形而上学に対して冷淡だったとしても、ラッセル哲学を文面の強調点に従って解釈せねばならないなどという決まりはない。第二に、かりにラッセルの哲学そのものが様相の形而上学に冷淡だったとしても、ラッセル哲学をラッセル哲学のイデオロギーによって解釈せねばならないなどという決まりはない（ましてや「前途展望」なのだから）。第三に（これが最もひどい誤りだが）、ラッセルの文面さらには哲学そのものが「様相の形而上学に対して非常に冷淡である」という観察それ自体が間違っている。ライプニッツの可能世界に対する多くの好意的な言及からしても、ラッセルが様相の形而上学に対して冷淡だったなどとはありえないことである。

「冷淡である」の意味にも問題があろう。様相を基本概念として優遇しなかった点でラッセルが「様相に冷淡だった」と言うことはできない。その基準に照らすと、クリプキ、D. ルイス、スタルネイカーら、様相の形而上学を展開した人々のほぼ全員が様相に冷淡だったことになってしまう。様相の理論は、様相を非様相へ還元する営みに他ならないからだ。となると、ラッセルがとりわけ冷淡だったとはいかなる意味でだろう。

ラッセルが様相に冷淡だった根拠として、高村氏は次のように言う。「ラッセルの主張は、必然的な命題関数とはすべての値に関して真であるものであるということに過ぎず、

用それ自体は、ラッセル自身も（そしてあらゆる哲学者が）余儀なくされていることであり、特に問題はないはずである。

*11 本稿の査読者の一人が指摘したように、本書が「必然的」の意味を確定せぬまま「あらゆる心の必然的存在」を論じたために、書評者に無用の反発を感じさせたのかもしれない。その点はたしかに私は反省せねばなるまい。ここで念のため論証風に整理しておこう。

①中性一元論では、いかなる可能的な物質も心も法則も、論理的構成物という点で、存在論的に同格である。②私やあなたの心は可能的な心である。③論理的構成物は、真の实在ではない。④したがって、中性一元論では、私やあなたの心は真の实在ではない。⑤常識では、私やあなたの心は真の实在である。⑥したがって、(③と⑤の語法上の衝突を⑤に合わせて調整すれば) 常識+中性一元論では、あらゆる可能的心は实在する。⑦实在していると証明できるものは、必然的に实在している。⑧したがって、常識+中性一元論では、あらゆる可能的心は必然的に实在する。——いずれにせよ、ここでの「必然的」は無条件の「あらゆる可能世界において」の意ではなく（本書末尾で引き合いに出したのも様相实在論ではなく多宇宙だった）、常識的語法⑤に合わせて中性一元論を語り直せば「あらゆる心が实在する」と証明できる、という意味での必然性であった。

現実に真であるという以上のものではけっしてない」(40頁左)。これは二重の意味で理解に苦しむ言説だ。まず、「すべての値に関して真である」と「現実に真である」が同じだとはどういうことか。「現実に真である」は命題についての特徴づけであり、「すべての値に関して真である」という命題関数の特徴づけとは明らかに違う。それでもなお、単なる真と必然性とをラッセルは区別しなかったというのか。高村氏自身が出している『論理的原子論の哲学』第5講と『数理哲学序説』第15章を読み直していただく。伝統哲学が「命題関数と命題を混同」(Russell,1918,p.96-7)してきたせいで、これまで「必然性という概念によって真理に何が付け加えられるのかについて明瞭な説明がされたためしがない」(Russell,1919,p.165)のは困ったことだ、さあ自分が明瞭にしてみせよう、とラッセルは意気込んでいるのである。高村氏の主張とは正反対であることが明白だろう。そもそもこのような具体例を持ち出すまでもなく、ラッセルが様相を軽んじることなど、内包的論理学者としてありえないのは当然なのだ^{*12}。

第二に、「必然的な命題関数とはすべての値に関して真であるものであるということに過ぎず」とはどういう意味だろう。「必然的な命題関数」を「すべての値に関して真である命題関数」と見なしたところにこそ、ラッセルの様相哲学の堂々たる真骨頂があるのではないか。それを「過ぎない」と評して「ラッセルは必然性を形而上学的に実のある概念としては認めていない」とは一体？ 30年前のクリプキやヒラリー・パトナム、ニコラス・レッシャーらによるステロタイプのな(「新理論」宣揚のためのスケープゴートとしての)ラッセル像^{*13}を紹介するためならともかく、リアルなラッセル評としてはとても通用しない見方だろう。

命題関数の性質として扱うことが「その概念に対して冷淡」ということであるならば、ラッセルは「存在」に対しても冷淡だったことになってしまう。なにしろラッセルにとっては個体について存在は語れず、命題関数についてだけ存在非存在が判定できるのだから(pp.130-1)。もしその見方でいくなれば、ラッセルを「存在の哲学者」と捉えた本書の方針そのものに高村氏は異を唱えねばならなかったはずである。

そう、ラッセルにとって可能性・偶然性・必然性とは、「存在」概念の特殊例だったのである。では、何の存在が可能性・必然性なのだろうか。実は何でもよい。議論の文脈次

*12 ラッセルの様相論について確認するには、Cocchiarella, 1987, pp.222-43, Dejnozka,1999が便利である。とくに後者では、ラッセルの様相・可能世界言説の実例がテキストに即して随所で挙げられている。その中には、高村氏が翻訳した『哲学入門』のp.78(訳書ではp.97)も含まれている。

*13 Dejnozka, 1999は、「ラッセルはその強い影響力ゆえ、二世代にわたる様相論理の停滞に対して一人で責任を負うべきだ」という趣旨の諸言説(Rescher,1979,pp.146-8, Bradley,1992,p.63等)を引いて、「そういう考えの信奉者こそ、様相論理の停滞に対して責任がある」と皮肉っている(Dejnozka,1999, p.21)。たしかに、ラッセル哲学にもっと早く様相論理へのお墨付きが読み取られれば、可能世界意味論の市民権獲得は数十年早かったことだろう。

第で何でもよいというところがラッセル流様相論理学の融通性を示すのだが、俗に命題と呼ばれているものの可能性・必然性について特に言えば、量化の範囲は「可能世界」である。

様相を量化として考える可能世界意味論のアイデアは、様相を命題関数の量化と考えたラッセルの様相観の直系の子孫である。ラッセルが「伝統哲学の誤り」として弾劾したように、通常は様相というものは（現在でも！）命題関数ではなく命題にかかるものと解釈されるが*14、命題と称しているものも、実は命題関数と解することができる。命題とは、

「諸可能世界」を範囲とする隠れた変項を持つ命題関数なのだ。こうした命題の再解釈については本書 p.80 で (p.61 を承けて) 触れておいた。「命題の階層は、実はオーダーである。命題とは、現実世界を項とする属性、として解釈できるからだ。命題「人間は死ぬ」は、現実世界にあてはまる述語的属性である。（中略）どの命題も、同じ現実世界を項とする属性なので、命題にタイプの区別はないのである」。命題とは世界の属性である（世界を項とする命題関数である）という命題観は、これまでも私が三浦, 1997,p.33 その他で何度か確認した見方であり、命題は世界の集合であるという捉え方に比べ、論理哲学において決して異端思想ではない。集合より命題関数を基本とするラッセルの存在論からすれば、世界を項とする命題関数という命題観は、形式的にばかりでなく内容的にも納得できるだろう*15。

つまりラッセルにおいては、命題関数の属性として、「存在」と「様相」は同列に（というより後者が前者の応用として）扱われていたのだ。まさしく可能世界意味論の本質的スキーマである。逆に言えば、可能世界意味論は、ラッセルの様相理論の単なる一応用例にすぎない。このことは一般に認知されていないので、強調して強調しすぎることはない。前述のとおり、可能世界意味論の創始者の一人であるクリプキその人が、ラッセルは様相の問題を考慮しなかったという神話を広めた張本人なので、ラッセルの様相論理との親近性は改めて認識される必要があるだろう。本書はしばしばラッセルの先駆者的性格を指摘し、後期ウィトゲンシュタインの「家族的類似」概念もしょせんはラッセルの「非述語的属性」の特殊例たる「典型性」概念のパクリに過ぎないと述べ (pp.87-8)、日常言語の多義性をむしろ尊んだ記述理論こそ日常言語学派の源泉であると評しておいたが (p.126)、

*14もちろん、de re 様相は命題より命題関数にかかっているかのように一般にも解釈される。ただしそれはここで論じるべきラッセルの様相論とは関係ない。ちなみに、de re 様相と de dicto 様相の区別を精密化する装置としてラッセル記述理論が活用されうることについては、本書 pp.122-6 で指摘した（それはもともと Kripke,1977 が示唆していたことである）。

*15 先ほど引用した『論理的原子論の哲学』『数理哲学序説』のラッセル語録「命題と命題関数を峻別すべし」と矛盾するように思われるだろうか。矛盾はしない。命題は、世界を陰伏的変項の範囲とする偽装命題関数なので、通常 of 明示的な命題関数とは異なる。命題は命題関数の特殊例である。ここから、注4で触れた「命題と命題関数のいずれが基本的か」という問題にも自ずと答えが導かれると思われる。

可能世界論についても、ラッセルの様相概念の一特殊例に過ぎないということを「前途展望」の中で一言明示してもよかつたくらいかもしれない。

いずれにしても、本書「前途展望」の部分は、「原-ラッセル的枠組みで開かれる哲学的展望の一端を、中性一元論に即して最後にぜひ概観しておこう」(p.199)という付録的論考だった。私の言う「原-ラッセル的枠組み」とは、「形而上学としての論理学(最も一般的な科学)」という、ラッセルがしばらくは保ちつつ結局は捨てたラッセル的存在論のことである。よって、「原-ラッセル的枠組みで開かれる哲学的展望の一端」というのは、「形而上学としての論理学」観をラッセルがセンシビリア論の段階で保ち続けていたらどうなったか、という整合的再構成の試みに他ならない。高村氏のラッセル解釈は、あまりに貧しすぎるように思われる。「前途展望」で私が仄めかした程度の外挿的試みにアレルギーを示されるようでは、記述理論やセンシビリア論(すでにして常識を超えた理論!)を学んだ意味がどれほどあるのだろう。哲学実践としてはもちろん、哲学研究、哲学者研究、さらにはテキスト研究としてすら、単なる教養体験に終わらせるにはもったいない豊かな鉱脈が、ラッセルの著作のネットワークには息づいているのである。

参考文献

- Bradley, Raymond, 1992 The Nature of All Being (Oxford U.P.)
- Cocchiarella, Nino B. 1987 Logical Studies in Early Analytic Philosophy (Ohio State Univ. Pr)
- Dejnozka, Jan 1999 Bertrand Russell on Modality and Logical Relevance (Ashgate)
- 飯田隆, 1987 『言語哲学大全 I 論理と言語』 (勁草書房)
- Kripke, Saul A. 1972 Naming and Necessity (Harvard U. P., 1980) 八木沢敬、野家啓一訳『名指しと必然性』産業図書、1985
- 1977. "Speaker's Reference and Semantic Reference", Midwest Studies in Philosophy 2(U. of Notre Dame P.) 黒川英徳訳「話し手の指示と意味論的指示」(『現代思想』1995年4月号)
- 三浦俊彦, 1995 『虚構世界の存在論』 (勁草書房)
- 1997 『可能世界の哲学』 (NHK出版)
- 2000 『論理学入門』 (NHK出版)
- 2006 『ゼロからの論証』 (青土社)
- Rescher, Nicholas, 1979 "Russell on Modal Logic" Roberts, G.W. 1979 Bertrand Russell Memorial Volume (George Allen and Unwin)
- Russell, Bertrand, 1912 The Problems of Philosophy (Oxford U.P.) 高村夏輝訳『哲学入門』ちくま学芸文庫、2005
- 1918 The Philosophy of Logical Atomism (Open Court, 1985) 高村夏輝訳『論理的原子論の哲学』ちくま学芸文庫、2007
- 1919 Introduction to Mathematical Philosophy (Routledge) 平野智治訳『数理哲学序説』岩波文庫、1954
- 1959 My Philosophical Development (Spokesman Books) 野田又夫訳『私の哲学の発展』みすず書房、1960

戸田山和久, 2007 「ラッセル」 (飯田隆編『哲学の歴史 11 論理・数学・言語』中央公論新社)

Questions about Bertrand Russell; His Metaphysics of Modality, and Some Other Topics

Toshihiko Miura

It seems necessary to reply to the review of my book Paradoxes of Bertrand Russell, by Natsuki Takamura on this journal No.106. Takamura was involved in verbal trivialities and repeated a stereotyped view to the effect that Russell did not admit the significance of modality in metaphysics. On the contrary, Russell's idea of modality as properties of propositional functions, not of propositions, must be estimated to have anticipated the possible world semantics. My book suggested it, and many texts by Russell himself and other scholars support the interpretation.